

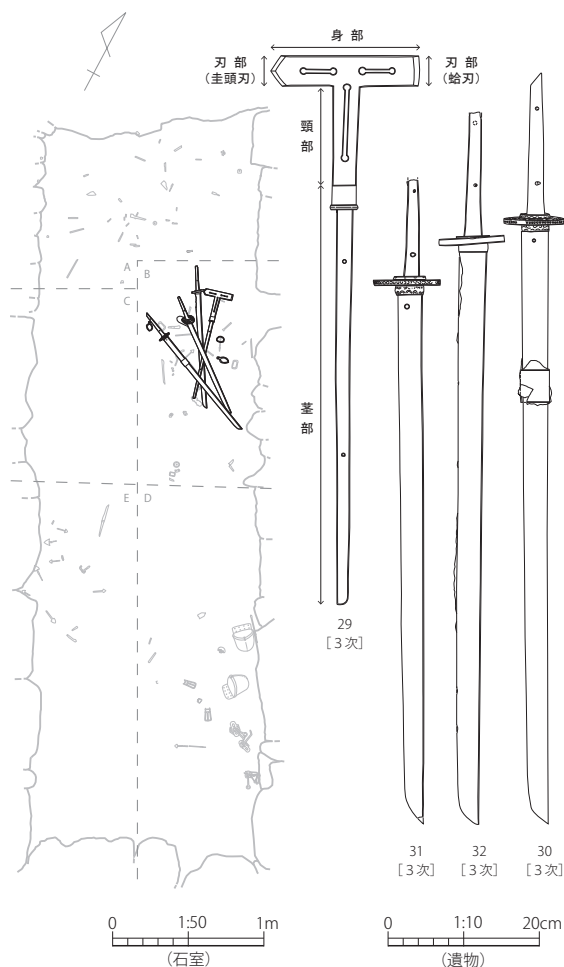
第4章 考 察

第1節 日本列島における丁字形利器について

佐藤 祐樹

はじめに

東平1号墳を特徴付ける遺物のひとつに丁字形利器^{ていじがたり}がある。しかし、その特異な形態の一方で、用途や系譜、年代など不明な点が多い。東平1号墳において丁字形利器が出土した当時は、隣市である沼津市宮原2号墳においても出土例が認められていたがその後、資料の増加はあまりなく、現在、列島内で4例が認められるのみである。以下では、丁字形利器の類例を報告し、用途や系譜などを考察する基礎としたい。



第53図 丁字形利器出土状況

1 丁字形利器の類例

静岡県富士市東平1号墳

東平1号墳は石室全長は5.12mを測る横穴式石室墳で、周溝の内縁から推定される墳丘規模は南北13.50m、東西12.75mを測る円墳である。副葬品として、大刀は象嵌装大刀を含めて3振が出土しており、大刀の横に並べられるように丁字形利器が出土した。

東平1号墳例は、両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別される。全長72.5cm、身部が長さ19.7cm、幅4.0cm、厚さ5.5～6.0mmで、頸部が長さ13.1cm、幅は身部との接合部分が3.6cmでそこから関部に向かって細くなり3.2cmとなる。茎部は55.4cm、幅1.6～2.1cm、厚さ3.5mmを測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしている。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列二箇所、幅6mm程度の両端玉縁の細带状の透孔がある。玉縁の直径は9mmから10mm程度で、全体で長さ4.8cmを測る。

頸部にも一箇所、長さ10.15cm、幅6mm程度の両端玉縁の細带状の透かしをもつ。

関は両関と推定され、鉏は長さ3.3cm、長軸3.3cm、短軸2.3cmの断面楕円形をなし、下端は覆輪のように環状の金具が巻いてある。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。

茎部は細長く、茎尻は隅切りの形態を示す。関から10.1cm、35.6cmの二箇所に目釘穴があり、茎尻に近いほうには目釘が残存する。目釘は1.7cmが残存する。

埋葬年代は他の共伴遺物から7世紀中頃(飛鳥Ⅱ)と考えられている。

静岡県沼津市宮原2号墳

宮原2号墳は静岡県沼津市下香貫にかつて存在した古墳である。後藤守一らにより報告され知られるようになったが（鈴木・後藤 1922）、正式な発掘調査での出土ではなく、墳丘や石室規模、出土状況など明らかでないことが多い。それによると榊原太郎とされる人物が高さ4m程度の円墳を発掘し、全長9m程度の横穴式石室に組合せ式石棺が2基存在したらしい。そこから丁字形利器1とともに、金環、刀剣、鉄鏃1、環状鏡板付轡1、鏡板付轡1、壺鐙2（1セット）、鉸具1、須恵器（坏蓋3、高坏1、長頸壺1、フラスコ瓶2、平瓶2、甕2）が出土したとされる（沼津市 2002）。

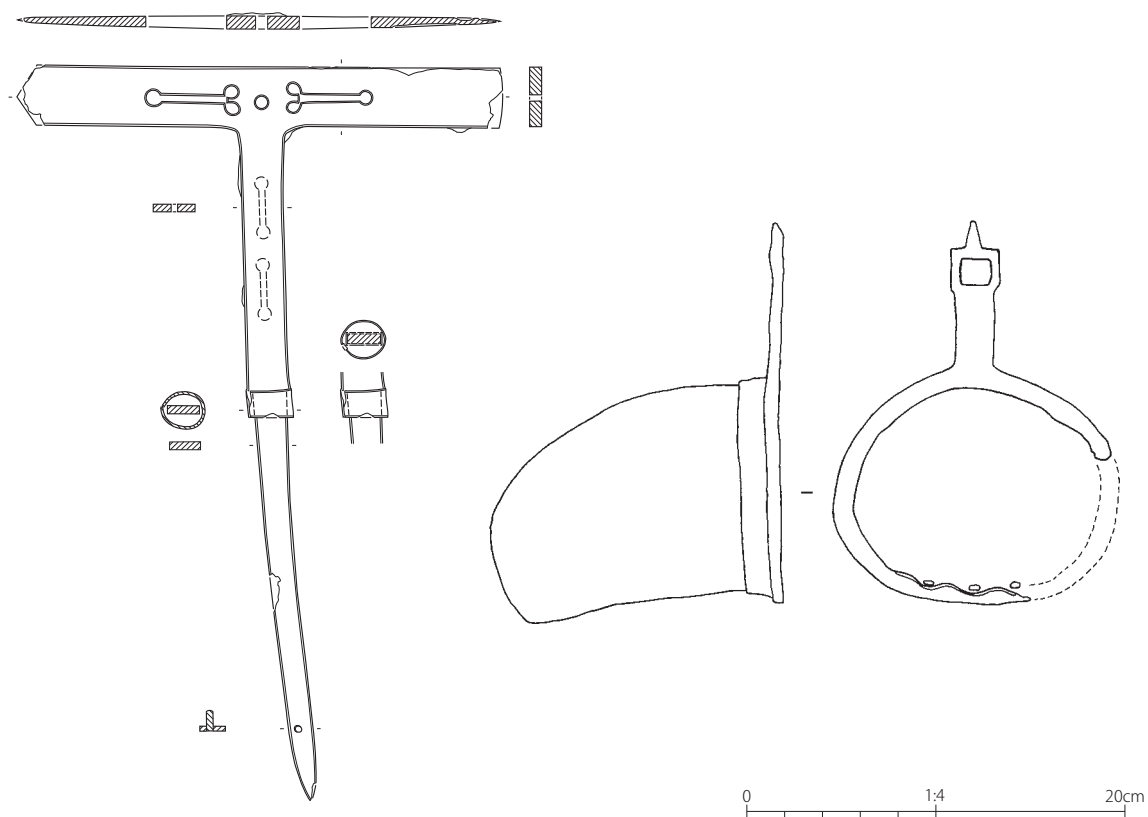
宮原2号墳例は、今回の報告にあわせて改めて実測を行なった。両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別される。全長38.9cm、身部が長さ残存で25.3cm、復元値で25.6cm、幅3.2cm、厚さ5.5～6.0mmで、頸部が長さ13.9cm、幅2.5cm、厚さ4mmを測る。茎部は21.8cm、幅1.2～1.7cm、厚さ4mmを測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしていると考えられるが欠損しているため明らかではない。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列二箇所、幅5mm程度の両端玉縁の細帯状の透孔がある。内側の玉縁は2個認められ、玉縁の直径は9mmから10mm程度で、全体で長さ4.5～5.0cmを測る。また、細帯状の透かしの間には直径7mm程度の円形透かしをもつ。

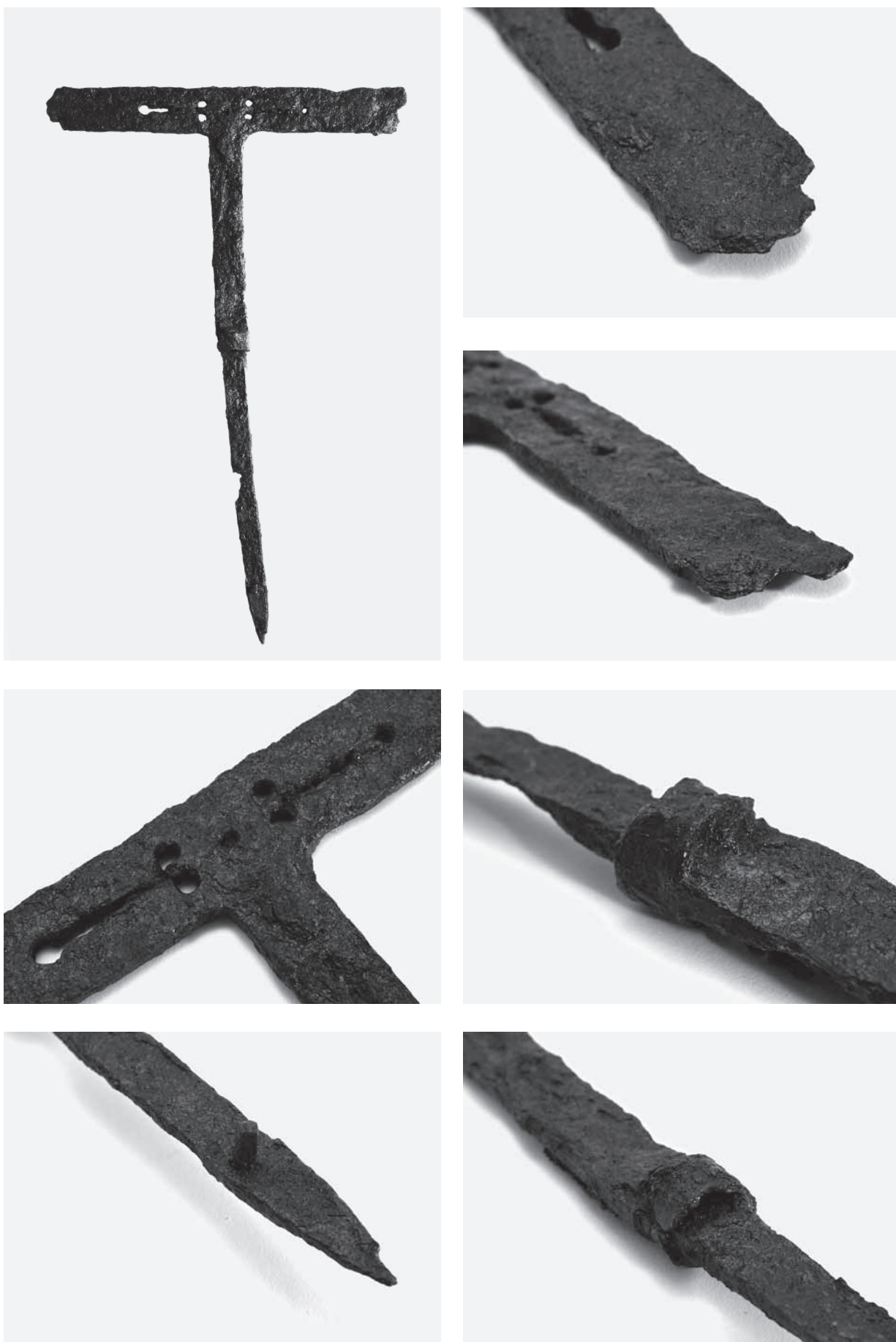
頸部にも一箇所もしくは二箇所、長さ3.3cm、幅3mm程度の両端玉縁の細帯状の透かしをもつように観察される。

関は両関と推定され、鉏は長さ1.5cm、長軸2.3cm、短軸2.0cmの断面楕円形をなす。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。

茎部は細長く、茎尻は尖る。関から7.5cm、17.9cmの二箇所に目釘穴と考えられる痕跡が有るが関側については明確ではない。茎尻に近いほうには目釘が残存し1.1cmが残存する。



第54図 宮原2号墳出土遺物



第 55 図 宮原 2 号墳丁字形利器

時期については、相伴している壺鐙から推測すると、開口部に平行する受口で踏込の舌のないタイプ（第3節大谷論考参照）で、TK209 型式～飛鳥Ⅰ併行期のものが多く、『静岡縣史』（静岡縣 1930）に掲載された須恵器の写真の時期とも矛盾しないことから、TK209 型式～飛鳥Ⅰ併行期と考えられる。

宮城県多賀城市多賀城跡 SI2300 工房跡

宮城県多賀城跡大畑地区（第 66 次発掘調査）の SI2300 工房跡から出土した（宮城県多賀城跡調査研究所 1996）。SI2300 工房跡は建替えによる拡張（SI2300A 工房跡→SI2300B 工房跡）があり、さらに SI2300B 工房跡は床面の嵩上げの整地により三段階がある。

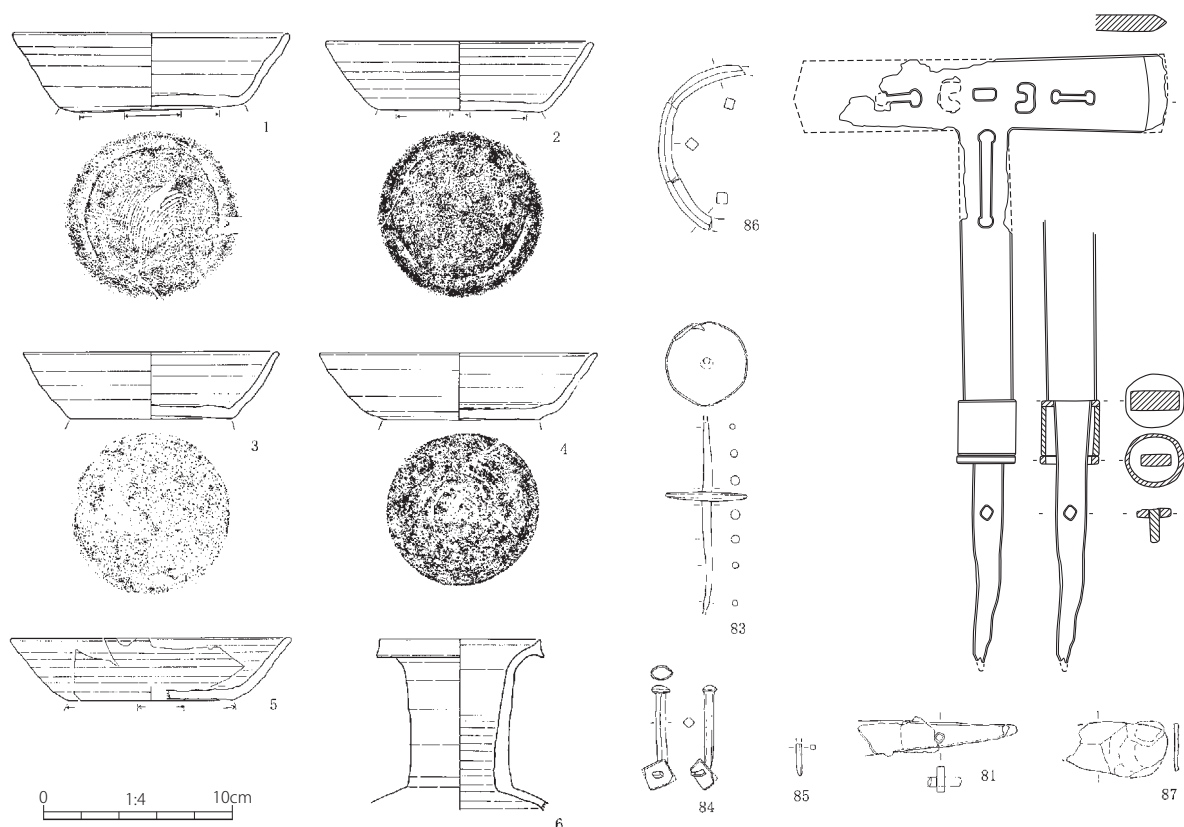
丁字形利器はその最終段階である SI2300B 工房跡第3段階において出土している。SI2300 全体では、折り釘や鋳付釘、板状鉄製品、壺金具、錠前、刀子、紡錘車そして丁字形利器などの豊富な鉄製品とともに鍛冶炉が検出されていることから、新たに鉄製品を製作するための再利用品の素材として工房に持ち込まれたものと考えられている。8 世紀後葉から 9 世紀初頭頃の遺構と考えられている。

全長 31.7cm、身部は 70 近く折り曲がった状態で出土し、折れを伸ばした状態で長さ 17.2cm が残存し、幅 3.7～3.9cm、厚さ 8mm を測る。また、頸部は長さ 14.1cm、幅 2.5cm、厚さ 10mm、茎部は先端がわずかに欠損するものの 13.8cm、幅 2.0cm、厚さ 6mm を測る。

身部の一方は蛤刃をなし、もう一方は欠損している。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列に左右対称の透孔があり、中央に隅丸長方形透かし、その両脇に勾玉状透かし、さらに両端玉縁細帯状透かしが配置されている。頸部にも一箇所、長さ約 5cm 程度の両端玉縁細帯状の透かしをもつ。

関は両関と推定され、鎌は長さ 3.1cm、長軸 3.2cm、短軸 2.8cm の断面楕円形をなし、下端は覆輪のように環状の金具が巻いてある。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。茎部は細長く、関から 5.7cm の箇所が目釘穴がある。

出土土器から 8 世紀後葉から 9 世紀初頭頃の遺構と考えられているが、製作年代はさらにさかのぼると考えられる。



第 56 図 多賀城跡 SI2300B 出土遺物

兵庫県香美町月岡下古墳

兵庫県月岡下古墳は、土地区画整理事業の事前調査として確認調査が行われ、丁字形利器（概報では「鉄斧状鉄製品」）が出土しているが（香住町教育委員会 1997）、これまで図が公表されておらずあまり知られていない資料であったが、本報告にあわせて、共伴遺物とともに図化作業を行なった。

月岡下古墳は兵庫県美方郡香美町香住区に所在する横穴式石室墳で、奥壁と片側の側壁が良好に残存し全長 4.3m、幅 1.6m を測る。墳丘規模、墳形ともに明らかではない。確認調査のみで古墳そのものは現在も保存されているため、副葬品の全容も明らかではない。現在確認されるものは、丁字形利器 1、大刀 1、鉄鏃 4 以上、馬具（鉸具 2、飾金具 5 以上）、不明鉄製品 1、耳環 4、勾玉 1、管玉 2（内 1 点はガラス製）、切子玉 10、鉄斧 1、刀子 1、ヤリガンナ 1、紡錘車 1、須恵器 22（坏蓋 7、坏身 8、碗 3、高坏 2、壺 1、甕 1）である。耳環の個数などから追葬の存在が推測され、須恵器も TK209 型式期のものが認められる。丁字形利器は須恵器の坏身や坏蓋に身部を重ねるように出土しており、後述するように茎部が振れた状態で出土している。

月岡下古墳の丁字形利器は身部の形状や透かしの形状が前述の三例とは異なるものの両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下に T 字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別されるなど

の基本的要素は共通する。保存処理の際に茎部のねじれを修正しており全長は 81.6cm、身部が長さ 19.9cm、最大幅 5.9cm、厚さ 1.3～1.5mm で、頸部が長さ 9.4cm、幅は身部との接合部分が 2.8cm、厚さ 1.3cm。茎部は出土時に振れて直線的になっていたが、処理後、長さ 66.6cm、幅 1.4～1.8cm、厚さは茎付近で 10mm、茎尻側で 4mm を測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしている。圭頭刃側の刃部は両刃、蛤刃側は扁平方刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の厚い板状をなしている。身部の透かしは中央の縦長方形の透かしを中心に左右に展開する。圭頭刃側には長三角形の透かしを横にして先端を刃部側に向けている。また、三角形の先端上下には勾玉形透かしの凸部を向かい合わせるようにして二個配置する。逆に蛤刃側は幅 0.5cm、長さ 5cm の縦長方形の透かしを上下二段に配置している。

頸部に二箇所、長さ 3.6cm、幅 5mm 程度の縦長方形の透かしを縦に二段もつ。

関は両関で、鉏は残存しない。茎部が振れていて出土したことからも副葬時には柄が装着されていなかった可能性がある。

茎部は細長く、茎尻は欠損する。肉眼観察からは目釘穴は認められない。

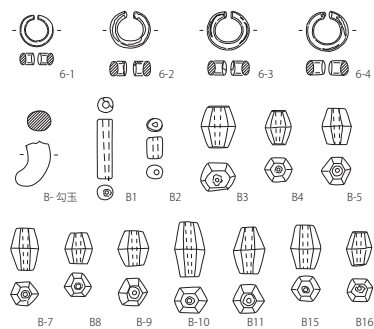


第 57 図 月岡下古墳遺物出土状況（1）

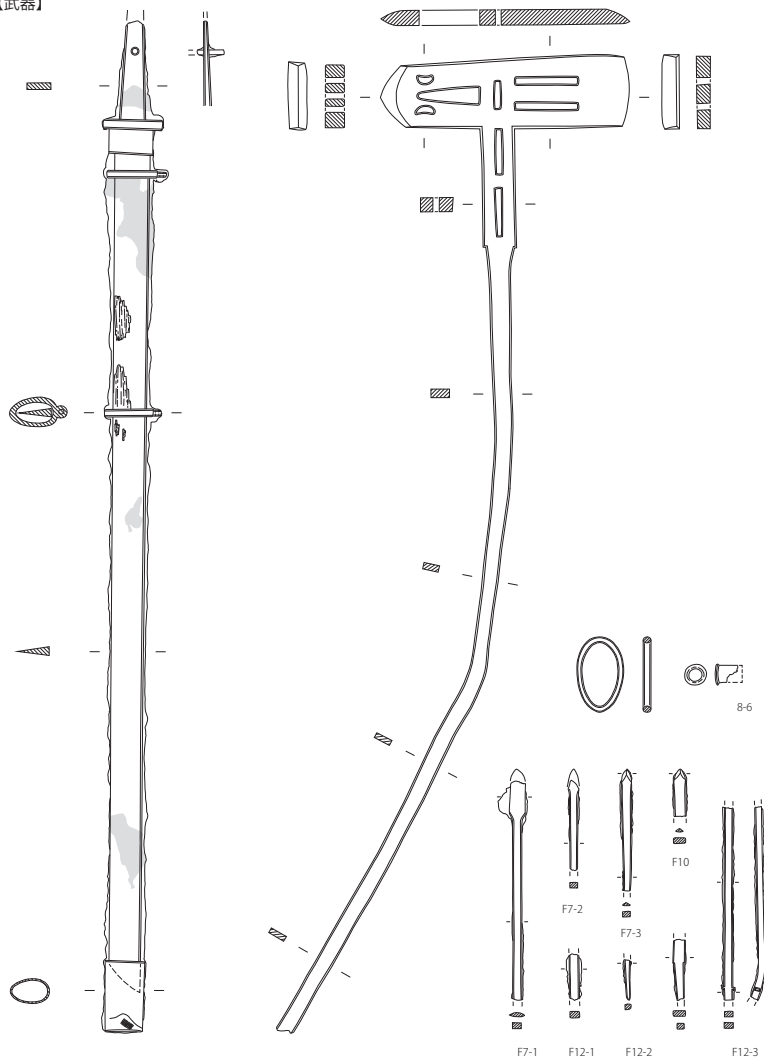


第 58 図 月岡下古墳遺物出土状況（2）

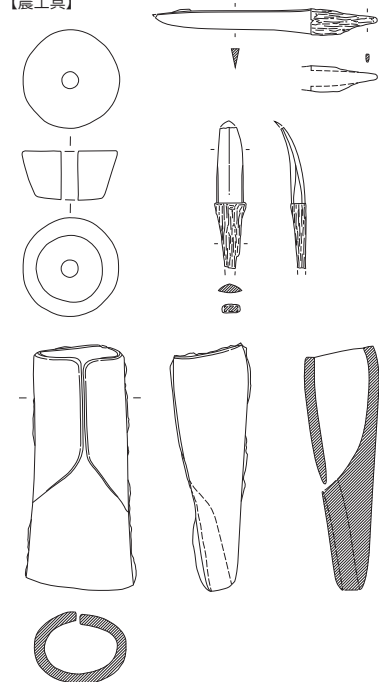
【装身具】



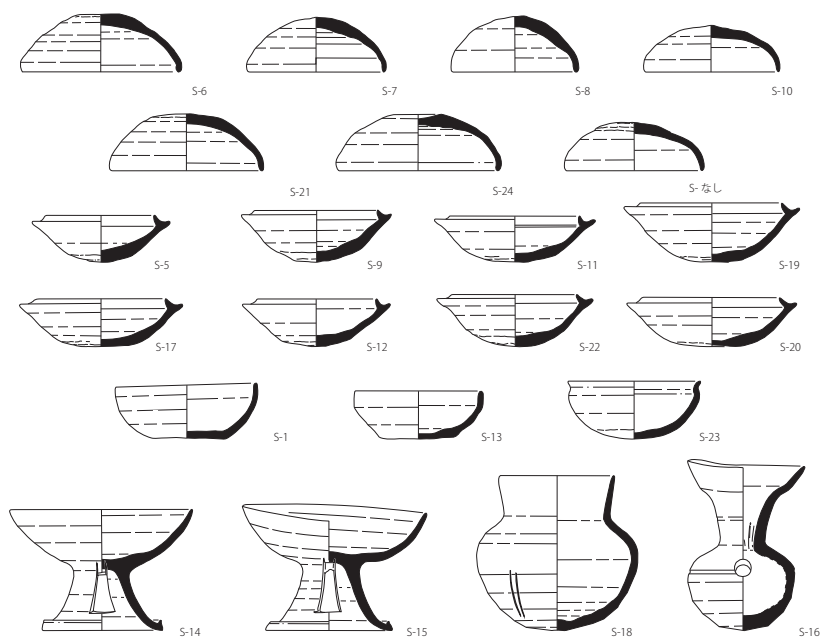
【武器】



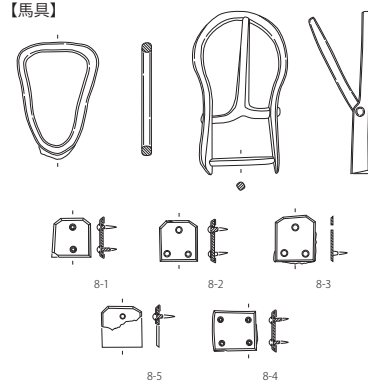
【農具】



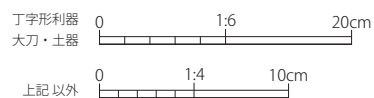
【土器】



【馬具】



【不明鉄製品】



第 59 図 月岡下古墳出土遺物



第 60 図 月岡下古墳丁字形利器



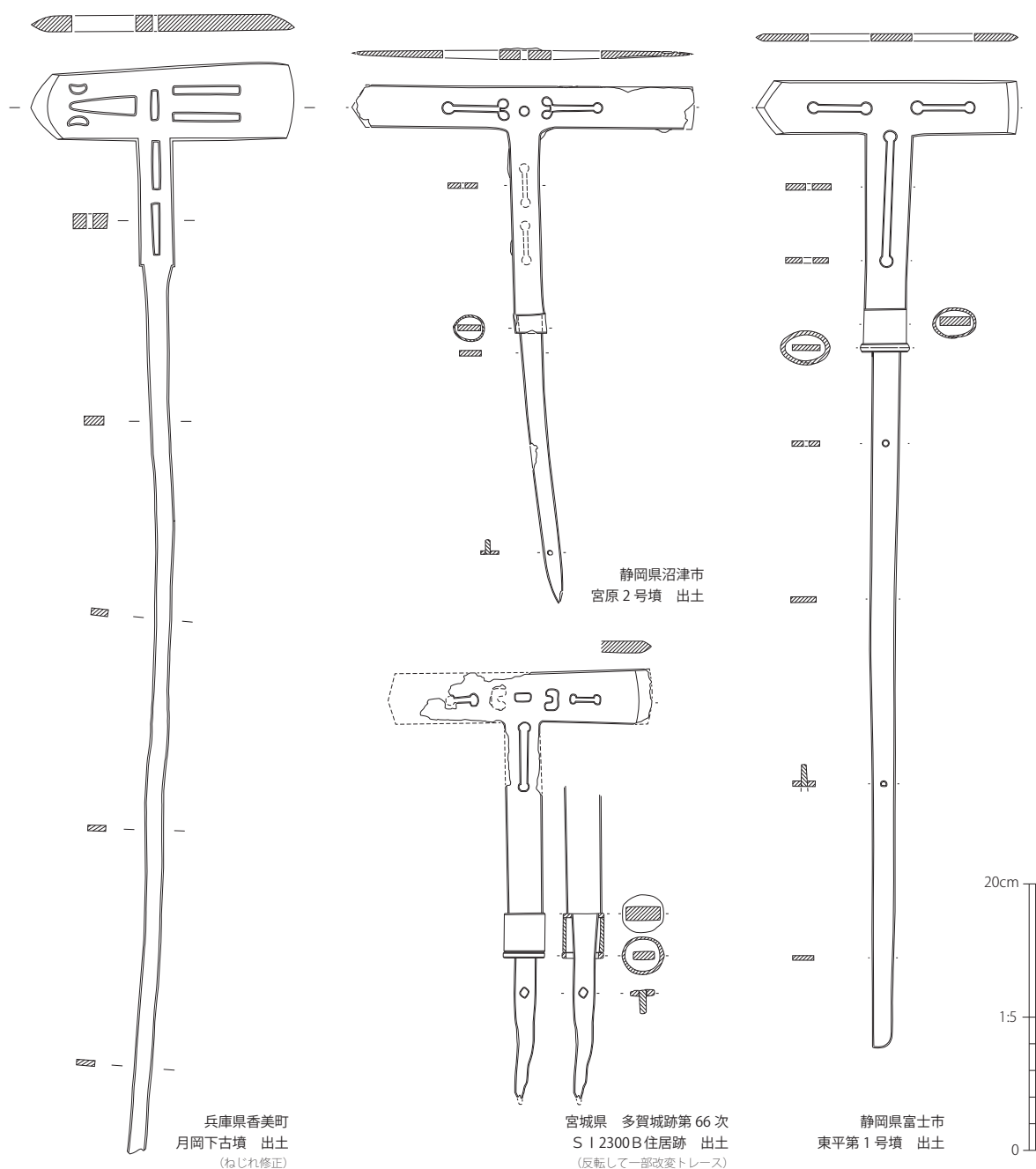
第 61 図 月岡下古墳 出土遺物

2 形態的特徴と透かし文様

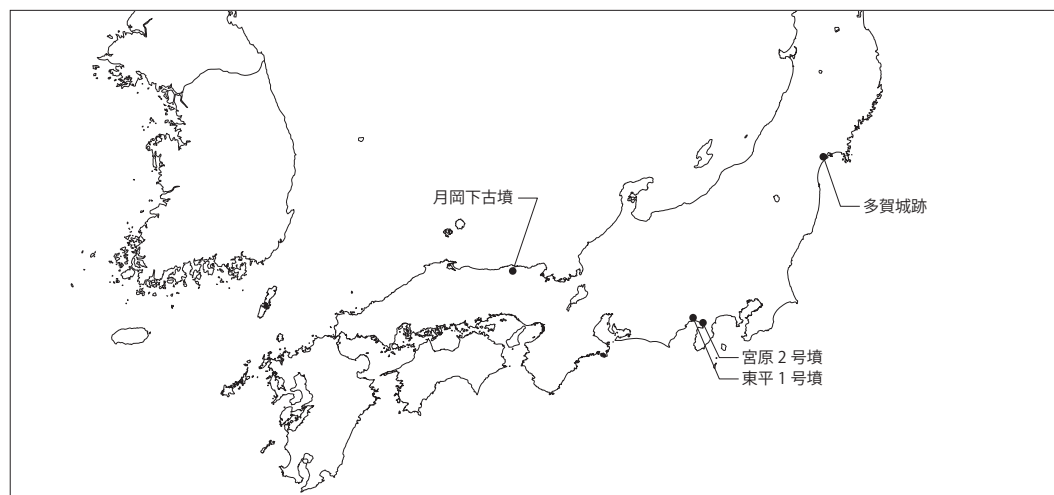
国内の丁字形利器 4 例についてその概要を述べてきたが、その特徴についてまとめておくこととした。

形態的特徴 「丁字形利器」の構成要素としては、板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部をもつことである。その上で、身部には圭頭刃の刃部と蛤刃の刃部をもつこと、さらにそれらが両刃である事も共通要素とい

える。月岡下古墳例は身部が厚くさらに頸部よりも幅をもっており、板状というよりも斧状をなしているといえる。4 例ともに身部に刃部をもつこと、茎に目釘穴などをもつことから、身部を上にして斧のようなものをモチーフとして製作されたと考えられる。東平1号墳では、大刀3振は切先を南に向け、丁字形利器は身部（刃部）を北側に向けて並べられるように埋葬されており、副葬時に本来の使用、持ち方が意識されていた可能性が高い。



第 62 図 列島における丁字形利器



第63図 丁字形利器出土分布図

透かし 丁字形利器を特徴付けるものに透かしがあるが月岡下古墳例と他の3例ではその形状に違いがある。月岡下古墳例では、身部の左右で透かし形状が対称ではなく長方形や三角形のように直線の透かしを主体として勾玉文の透かしがある。一方、他の3例は身部の中央を軸として身部の左右および下（頸部）に対称の透かしが施されている。また、透かしも両端玉縁細帯状透かしが多く施される。ただし、注目されるのが両端玉縁細帯状透かしの一方の玉縁が2個であることである。月岡下古墳例や多賀城跡例で認められる勾玉文が長方形透かしと組み合って産まれた透かし形状と推測される。

鍔の形状 月岡下古墳例は茎部分がねじられて出土しており、副葬時に柄が装着されていなかった可能性が考えられており鍔をもたない。一方で、他の3例については鍔を有している。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっていることが共通した特徴といえる。この切羽状金具で蓋をした鍔は東平1号墳の3振の大刀でも共通した特徴であり、注目される。

時期 4例のみのため、その製作時期を限定することは難しいが、月岡下古墳、東平1号墳、宮原2号墳ともに6世紀後半から7世紀前半頃の副葬と考えられる。多賀城跡例は古墳への副葬がされず、鉄製品の再生産材として8世紀後葉から9世紀初頭頃の遺構から出土しており、製作から伝世されていたもので、再利用材として溶かされる直前であったとも考えることが出来る。

おわりに

以上、国内4例の丁字形利器についてその特徴をまとめてきた。平成元年の出土から30年近くたち、その類例は多賀城跡と月岡下古墳の2例が増えたのみでその実態はあまり明確になったとはいえない。ただし、月岡下古墳例は身部が厚く、斧のような本来のモチーフを比較的忠実に表現している可能性が高く（次節鈴木論考参照）、東平1号墳の丁字形利器の祖形を考える上で貴重な資料といえよう。

謝辞

兵庫県月岡下古墳の資料は未公開資料で有るにもかかわらず、香美町教育委員会の御配慮により図化することができた。資料調査に際し、香美町教育委員会の石松崇氏に御協力いただきました。また、資料調査は、筆者のほか大谷宏治氏、鈴木一有氏、藤村翔氏との共同の成果である。さらに沼津市宮原2号墳例についても沼津市教育委員会に再実測の許可をいただきました。御協力いただきました小崎晋氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 香住町教育委員会 1997『山手開発に伴う埋蔵文化財確認調査概報』
- 静岡県 1930『静岡県史』
- 鈴木 嘉昭・後藤 守一 1922「丁字形利器發見古墳」『考古学雑誌』12-7
- 沼津市 2002『沼津市史 資料編 考古』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1996『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995』